

# いもち（稲熱）病とともに

寺 沢 租

関東東山地域に所属の長野県は、稲作が多い事等から成績検討会には北陸地区にも参加し、病害虫研究会も両者に加わってきた。私はいもち病に関与していた事から当研究会に出席する機会が多く、そのお陰で多くの研究仲間と接することが出来、また得る事も多かった。現職を離れた今、これ以外研究会のことは思い出せないで依頼の主旨にそえないが、折角の機会を与えて頂いたので、半生をいもち病とともに過ごしてきた中から2～3記してその責を果たしたい。

昭和24～57年まで農林水産省指定いもち病に関する試験研究に、また菌型の共同研究にも従事し、いもち病との付き合いは昭和63年退職するまで続いた。本病の第一人者栗林数衛博士の最後の弟子で、まず菌型の研究に着手した。農林17号、そして関東51号等が抵抗性転落した折で、標本の採集と接種に明け暮れた。当時いもち病の試験の主体は豊科稲熱試験地で行なわれていたから、長野農試本場では十分な施設がなく、噴霧接種には苦労した。そんな状況下で試行錯誤のすえ案出したのが注射接種法で、その成果を本誌第3号に発表し、これが本誌への初投稿となった。どのような経緯で案出したのか今は思い出せず、怪我の功名としか言えない。本法は菌型の共同研究の主査後藤和夫氏からは正常な接種とはいえないと指摘を受け、それでも共同研究で取り上げ、噴霧接種との比較検討をして頂いた。結果は不採用となったが、棄てる神あれば拾う神ありで、後年清沢茂久氏によっていもち病抵抗性遺伝子の解析の手法に採用され、再び陽の目を得たことは嬉しい。

今一つ後年になって簡易な圃場抵抗性の検定方法に取り組んできたが、未完成のまま退職を迎えた。最近になって小泉信三氏が愛知県の稲橋、東北の大曲で引き続いて検討され、活用出来そうだと嬉しい連絡を頂いている。筑波に農林研究団地が誕生した折り、団地内を案内して頂いたある研究員が「施設と研究業績は反比例する」と言われたことをふと思い出した。この考え方は地方の私達研究者を支えてきた事でもある。

豊科稲熱病試験地には初代常駐者として昭和35～42年の間文字通り試験に明け暮れた。当時は本病に特効的効果を示す水銀剤が全盛の時であったが、裏面でようやく水銀の人体への影響が問題となっていた。そして水銀剤に代わる防除薬剤の開発が急がれブラエスが登場、続いてカスミン、キタジン等が生まれその効果確認に全力を注いだ。葉や穂いもちの時期にはその効果確認に中央からは明日山秀文氏、後藤和夫氏、見里朝正氏等が、地域農試からは小野小三郎氏、山田昌雄氏等、他にも多くの本病に造詣の深い方々が来地し、時には二階の30畳敷の大広間に宿泊され、夜遅くまで懇談された事等今書きながら懐かしく思い出される。

指定試験は昭和57年度を以て閉じる事となり、全業績について「農林水産省指定いもち病に関する試験研究・50年のあゆみ」（長野農試・1983）に、また菌型の研究成果については「イネいもち病菌菌型ならびにその疫学的研究」（長野農試における試験研究業績集）（長野農試報告第45号・1994）に纏めたので参照されたい。

昭和63年退職後県植防松代研究所に6年間勤めたのを最後に純年金生活者となり、当会員も辞し、農業からは遠のいたつもりでいたが、いもち病の時期になると血が騒ぎTVのニュースが気になった。しかし農業の変化が進み、いもち病も表から消え、更にいもち病の研究仲間も消え去っていくのは淋しい限りである。稲の3大病虫害の1つと言われ会報も賑わしたいいもち病も今は過去のものとなり、本誌からは消え去るであろう。しかし稲熱病を正しく読む研究者が少なくなっても当研究会は益々発展し続ける事でしょう。